

私たちの住んでいる日本は、四方を海に囲まれ、国土の70パーセント以上が山という自然豊かな列島であり、古来より日本人は山の幸・水が育む幸・木々の恵みなどの自然の恵みを受け、暮らしを育んできた。そして、私たちが住まう家は、この山の幸に育まれた木を材料に「裏山の木」または「近くの木」という資源を活用して建てられてきた。

しかし、国内の林業の現状は木材需給率が4割に低下し、歴史ある日本の林業は割高なコストや販売不振、高齢化などによる人手不足などで立ち行かなくなっている。木材の多くは東南アジアの熱帯地域や、ロシアなど北方の国々から、遠く海を越えて輸入された木材が多く使われるようになってきている。このような輸入材に押され、国産材が使われなくなってしまったことなどにより、日本の多くの森林では手入れがされず、疲弊・荒廃しているのが現状である。

森林は木造住宅などの材料とされるだけでなく、森林によって山の斜面を保全し、水を貯え、その滋養を含んだ水によって、肥沃な平野をつくり、沿岸の海の生態の豊かさを生み出している。日本の森林の多くは戦後復興のために一部で森林が乱伐されたとはいえ、昭和30年代後半までは、人手が十分に加わり、管理されることでその健全な姿を保ってきた。しかし、戦後に植林したカラマツやひのき・杉などは、初期間伐の時期（樹齢40～45年生）をすでに超え、樹齢60年超と主伐の時期を迎えている森林があるにもかかわらず国産材の価格が低迷しているために、その大部分は伐採されず、放置されたままで、



金山の歴史と人々によって育かれた金山杉

現在は「山の荒廃」という現象が生じている。山の荒廃が進むことで、森林がもたらしてきた保全や資源循環をも危うくなっている。

このような危機感から、日本各地で国産材利用の推進運動が盛んになってきた。金山町でも全国に先駆けて、町をあげた林業振興のさまざまな施策に積極的に取り組んできたという経緯がある。昭和53年には若手の林業後継者らによる森林組合青年部が結成された。そして同年に町の商工会による「金山町住宅建築コンクール」が実施され、金山の美しい景観形成に寄与した施主と大工が表彰された。その後、

バリューサイト VALUE SIGHT

長伐期経営によって受け 金山杉の森林づくりとま

林業は高度経済性成長期を境に、木材住宅の減少や、安い輸入材の増加、木材に代わる新製品の登場、そして担い手の減少から、非常に厳しい時代を経た。しかし金山杉は長いサイクルで経営する独特な森林経営と、金山杉を生かした金山式住宅による地域づくりなどが金山杉を支えている。

昭和61年からは「街並み（景観）づくり100年運動」がスタートし、金山型住宅の特徴である切妻屋根に下見板と白壁を特徴とし、地元の金山材を使用した住宅が増えてきた。さらにこのような金山式住宅や金山杉の家を新築した場合、50万円を助成する取り組みも始めた。

金山町がこのような大胆で積極的な政策を実行することができたのは、1つに金山杉が国有林ではなく、私有林で、大美輪の杉に代表される美林があり、そして80年、100年、150年という優良林が多く存在しているからである。しかもその経営は長期育林で伐採する「長伐期経営」によって営まれ、山林所有者は3世代、4世代

と長期的な山づくりが継続されているところに特徴がある。

日本には三大美木の青森ヒバ、秋田杉、木曾桧があり、杉の産地としては表杉の吉野杉、北山杉、また裏杉の秋田杉がある。金山杉(カネヤマ系秋田杉)はこの秋田杉の地域品種とされ、金山杉の緻密な年輪と美しい木肌、温もりと優しさは他の品種と比べてすぐれた品質の高さを誇り、最近では「金山杉の家」にこだわる建築家も増えてきている。杉は気候風土により一本の木でも、根から先までそれぞれの木によって個体差があり、人間と同じ十人十色の表

るのは、年輪の緻密さは関係なく、単に経済性のみを優先した木材が使われることが多く、樹齢は15年から35年という短期間の未成木で製品化されているのが現状である。しかし、先述のように金山杉は80年から100年という長期育成での伐採を基本としており、「100年の木を使えば100年持つ」という技と心を継承した金山大工の建築に関する考え方も金山杉の魅力を高めている。

森林経営のなかで、このような長伐期経営を生かしていくためには、適時に間伐が実施されていくことが前提条件となる。県内各地の森林組合はそこに大きな悩みを抱えながら苦労しているというのが現状である。

金山町森林組合では、木材の良い部分だけを活用する幹材積管理から全木管理へ、つまり1本の立木から良質な建築用材・一般用材・合板用材・土木園芸用資材・製紙用パルプ材などの原料として、また枝や葉も資源循環エネルギーとして利用することで、木材のすべてを資源として利活用することに知恵を絞ってきた。それによって、現在は木材の市況が悪いなかでも間伐を推進できる環境を生み出すことができたと考えている。林業は計画的な植林、伐採を繰り返しながら継続して営むことが必要である。継続することで木が、林が、森が生き、そして山が、活気に満ち溢れる。治山は治水、豊かな平野は、後背の山あってのことと言われる。また、川や海の魚がおいしいのも山が豊かなればこそ可能である。連鎖する自然と地域の営みの中に生きている事を知り、「裏山の木」・「近くの木」で家を作るという考え方を呼び覚まし、木の文化を取り戻さなくてはならないだろう。そのためにも、金山の歴史がはぐくみ、町をあげて育ててきた金山杉を守り、さらに活用していくことを、金山町森林組合でも積極的に取り組んでいきたい。

継がれる ちづくり

最上



金山町森林組合
参事

杉井 範之

層を見せ、人々のライフサイクルに溶け込んでいる。

金山杉の歴史をさかのぼると、江戸時代に戸沢藩によって造林がすすめられ、その後明治後期から大正期に大幅な山林の払い下げが行われ、数軒の大山林所有者がその森林を受け継いできた。これらの大山林所有者は日本林業の先駆者であった金原明善氏による「山づくりが国を守る」という教えに従い、老若男女が腰弁当をさげ、10年間で1,000haという驚異的な杉の植林をしたのが今日の金山杉の基盤を作っている。通常、新植は年間30ha前後といわれており、これだけの規模の新植は他県では見られない。

今日、一般製材品として木材が市場に流通してい

■ 杉井 範之 (すぎい・のりゆき)

金山町森林組合 参事

1947年北海道美深町生まれ。北海道農林土木コンサルタント、天塩川木材工業(株)、キッチンハウス(株)・テクノパル(株)を経て現職。

〒999-5406 山形県最上郡金山町大字山崎34-5
TEL 0233-52-2840・FAX 0233-52-2740